日本語名詞述語文の記述的分類の再分析

ー機能論的観点からー

今田　水穂

キーワード：名詞述語文、機能論、措定、指定、同定

1. はじめに

日本語の名詞述語文(コピュラ文)には構文的、意味的、機能的に幾つかの種類のものがあることが知られており、様々な観点から分析、分類が試みられてきた。代表的な分類の一つは西山(2003)によるものであり、そこでは名詞述語文を六種に分類している。

【表１】西山(2003)のコピュラ文分類(西山, 2003, p.122)

	「AはBだ」	「BがAだ」
1.	措定文「あいつは馬鹿だ」	
2.	倒置指定文「幹事は田中だ」	指定文「田中が幹事だ」
3.	倒置同定文「こいつは山田村長の次男だ」	同定文「山田村長の次男がこいつだ」
4.	倒置同一性文「ジキル博士はハイド氏だ」	同一性文「ハイド氏がジキル博士だ」
5.	定義文 「眼科医(と)は目のお医者さんのことだ」	
6.		提示文 「特におすすめなのがこのワインです」

本稿では、特に措定、指定、同定という三つの概念を考察の対象とする。西山(2003)は名詞述語文の分類の基準として、名詞句の指示性という概念を重視している。それによると、措定文、倒置指定文、倒置同定文はそれぞれ次のように区別される[1]。

(1)　措定文　[指示的名詞句]　は [叙述名詞句(非指示的)] だ。
(2)　倒置指定文　[変項名詞句(非指示的)] は [指示的名詞句]　だ。
(3)　倒置同定文　[指示的名詞句]　は [指示的名詞句]　だ。

[1] 実際にはもう少し複雑である。倒置指定文には、主語が指示的であるが変項名詞句として機能する第二タイプの指定文がある。倒置指定文の述語名詞句の位置には変項名詞句が生起する場合もある。詳しくは西山(2003)を参照されたい。

名詞句の指示性は、コピュラ文の意味を記述する上で重要な要素である。しかしそれだけでコピュラ文の意味的、機能的な特徴の全てが記述できるわけではない。コピュラ文は名詞句が何を表すかという以外にも、二つの名詞句が表しているものが互いにどのような関係にあるかとか、文の使用によって談話状態にどのような変化を及ぼすかといった様々な特徴を有する。本稿の考えでは、西山(2003)が説明しようとしているようなコピュラ文の類型的区別のある部分は、名詞句の指示性だけで説明し尽くせるものではなく、意味論、機能論の中の指示理論以外の領域にも振り分ける必要があると考える。本稿では、最初に指示の理論で説明すべき事柄の範囲を限定し、名詞句の指示性以外に記述すべき意味論的、機能論的領域の種類について検討し、そのうち、特に機能論的領域についてコピュラ文の諸類型の特徴を分析する。

2. 指示理論・意味関係理論・機能論

2.1 指示理論

名詞句は様々な事物や概念を表す。常識的には、ある種の名詞句(例えば固有名や指示詞)は外界の実在物を指示すると考えられるが、これは正確ではない。我々は、原理的には我々の知覚や認識を通してしか外界の事物にアクセスすることはできないのであり、従って我々が言語によって表現する対象も、一次的には我々の心の中の心的な構成物である[2]。

名詞句によって表わされる心的構成物には様々な種類のものがある。個体はその一つであり、「ジョン」という固有名はジョンという個体を表す。別の種類の存在物は種(kind)と呼ばれるものである。Carlson(1977)は種が単なる個体の集合ではないことを説得的に論じており、種とは抽象的な個体概念であるとしている。

(4)　ジョンは賢い / ジョンが走っている。　(個体)
(5)　犬は賢い / 犬が走っている。　(種)

Carlson(1977)は、個体が空間的に束縛されるが時間的に束縛されない存在物であるのに対して、種は空間的にも時間的にも束縛されない存在物であると言う。筆者の考えでは、ある時点におけるジョンや別の時点におけるジョンを抽象して時間的指標を取り払ったものが「ジョン」という個体であり、さらに空間的指標も取り払って個々の個体の区別が無くなるところまで抽象したものが「犬」という種であると理解することができる。Jackendoff(2002)は、個体とは指標素性(図を地から区別するもの)を持つものであり、種とは指標素性を持たず記述素性(様々な種類の属性)のみを持つものであるという言い方をしている。

Carlson(1977)の種とよく似た概念に、Fauconnier(1985)の役割(role)がある。「フランス

[2] すなわち、本稿は心理主義的な意味論の立場を取る。実在主義的意味論と心理主義的意味論の対立に関する議論については、Lakoff(1987)、Jackendoff(2002)などを参照されたい。

大統領」という記述句は曖昧性を持ち、一次的にはフランス大統領という役割を表すが、二次的にはフランス大統領の実際の値である個人を指す(おおよそ Donnellan(1966)の属性的用法、指示的用法の区別に相当する)。

(6) フランス大統領は賢い。
　a. 誰であれ、フランス大統領であるものは賢い。　(役割解釈)
　b. フランス大統領であるサルコジは賢い。　(値解釈)

役割も、種と同じような抽象的個体として理解することができる[3]。役割と種の違いは、種が外延のあまり明確でない概念であるのに対して、役割は通常、一人ないし複数程度の閉じた外延を持つという点である。「フランス大統領」の値は通常は(ある時点においては)一人であろうし、「学級委員」の値はせいぜい一人か二人である。

2.2 意味関係

他にもいろいろな種類の心的構成物が存在するかも知れないが、さしあたって個体、種、役割という三種類の存在物についてのみ考察したいと思う。このような指示理論を採用した場合、コピュラ文の類型を特徴付けるために指示の理論が果たす役割は限られたものになる。措定文と倒置指定文に関して、個体、種、役割を表す名詞句の分布を考えてみることにしよう。固有名のような個体を表す名詞句は、措定文の主語の位置と倒置指定文の述語の位置に生起することができる[4]。

(7) 措定文　ラッセルはイギリス人である。
(8) 倒置指定文　記述理論の発明者はラッセルである。

種は、措定文の主語の位置、述語の位置、倒置指定文の述語の位置に生起することができる。

(9) 措定文　クレタ人は嘘つきである。
(10) 措定文　エピメニデスはクレタ人である。
(11) 倒置指定文　ミノア文明の担い手はクレタ人である。

役割は、措定文の主語、述語、倒置指定文の主語、述語のいずれの位置にも生起するこ

[3] 役割は、研究者によって様々に解釈される概念である。Fauconnier(1985)は、役割関数という言い方をしている。井元(1995)は関数モデル、範疇モデルという言い方で役割という概念を説明している。筆者自身の考えについては今田(2006)を参照されたい。役割と種の関係については、金水(1990)も参照。
[4] 措定文の述語の位置に固有名が生起することもあるが(e.g.「彼はバートラント・ラッセルだ」)、これは通常の個体ではなく「～という名前の人物」を表す用法と見なして除外する。西山(2003)参照。

とができる。役割を表す記述句は、役割それ自体を表す用法と役割の値(外延)を表す用法とがあるが、以下の例では役割それ自体を表す用法で用いられているものとする。

(12)　措定文　　フランス大統領は嘘つきである。
(13)　措定文　　サルコジはフランス大統領である。
(14)　倒置指定文　フランス大統領はサルコジである。
(15)　倒置指定文　サミットの次の議長はフランス大統領である。

個体、種、役割のような心的構成物のタイプの違いと、措定文、倒置指定文というコピュラ文の類型(あるいはそれを定義する西山(2003)の名詞句の類型)との間には、ある一定の依存関係が認められるが、しかし一対一対応のようなものではない。おおよそ、西山(2003)の指示的名詞句の位置には個体、種、役割いずれの事物も生起し、叙述名詞句の位置には個体は生起することができず、変項名詞句の位置には役割のみが生起することができる。

(16)　措定文　　[個体 / 種 / 役割] は [種 / 役割](叙述名詞句) だ。
(17)　倒置指定文　[役割](変項名詞句) は [個体 / 種 / 役割] だ。

これらの位置に生起する名詞句の特徴は、名詞句が表す事物自体の意味論的特徴によって記述するよりも、それらが文中において果たす意味関係とか意味機能[5]といった観点から記述する方が妥当であるように思われる。叙述名詞句は、対象の属する範疇とか、対象の有する属性・性質を表す。種や役割を表す名詞句は、叙述名詞句として(すなわち別の対象に範疇や属性を与えるものとして)機能することができるが、個体はそのように機能することはできない。倒置指定文は、ある内包的な概念に対して、その外延を結び付ける。変項名詞句は内包的な概念であることに加えて外延を列挙可能なものであることが要求され、役割はこの条件を満たすことができるが、個体(内包的概念ではない)や種(外延を列挙できない)はそのような条件を満たすことができない[6]。これらの位置にどのような事物を表す名詞句が生起し得るかは、意味的な選択制限の問題である[7]。

---

[5] もっとも意味機能という言い方をすると、次の節で述べる機能論的特徴との境界が曖昧になるだろう。ここでは意味関係という静的な概念を用いて意味と機能の間に一定の区別を設けたいと思うが、意味関係と機能は連動した概念である。例えば、コピュラ文において二つの名詞句が表す事物が対象と範疇の関係にあるならば、この文は対象に範疇を割り当てる機能を有する。詳しくは次節参照。

[6] ただし、ある一定の条件下においては種が倒置指定文の主語になることもあり得る。「例えば」のような副詞が用いられる場合(「イギリスの哲学者は、例えばラッセルだ」)や、外延の候補となる要素の範囲が文脈的に制限される場合(「次の中で、イギリスの哲学者はラッセルだ」)など。

[7] 実際のところ西山(2003)の指示的、非指示的という概念は、かなりの程度、意味機能の問題に踏み込んだものである。西山(2003, p.60)は、指示的、非指示的とは名詞句に内在する性質ではなく、文中における意味機能として決定されるものだとしている。しかし筆者の考えでは、文中における機能とか文中の他の要素との関係といった概念は、厳密には指示の理論に組み込むべきものではない。西山(2003)が説明しようとしていることの少なくともある部分は、指示の理論から切り離して考えるべきである。

(18)　措定文　[対象] は [範疇・属性] だ。　← ×個体 ○種 ○役割
(19)　倒置指定文　[内包] は [外延]　だ。　← ×個体 ×種 ○役割

2.3 機能論的特徴

コピュラ文に関して記述するべき別の特徴は、機能論的なものである。この特徴は、措定文と倒置同定文の区別を記述するときに必要になる。措定文と倒置同定文は外見上はよく似ているが、倒置同定文が意味的に対応する同定文を持つのに対して、措定文はそのような言い替えはできないとされる。

(20)　措定文　ラッセルはイギリス人である。
(21)　倒置同定文　ラッセルは記述理論の発明者である。
　　＝同定文　記述理論の発明者がラッセルである。

指示や意味関係のレベルにおいて、措定文と倒置同定文の間に明確な違いは観察できない。どちらも、主語の位置には個体、種、役割を表すような名詞句が生起し、述語の位置には種や役割を表すような名詞句が生起する[8]。また、主語名詞句と述語名詞句が表すものは、意味的に[対象]と[範疇・属性]の関係にある。違うのは、心の中で既に同定されている(何者であるか分かっている)対象に対して属性を付け加えるか、属性を与えることによって対象が同定されるかという点である[9]。このような違いは、名詞句の指示のレベルで取り扱う問題でも、意味関係のレベルで取り扱う問題でもない。機能論的なレベルで記述するべき問題である。

意味関係と機能論的特徴はある程度連動している。措定文や倒置同定文において、二つの名詞句が表す事物は対象と範疇・属性の関係にあり、従ってこれらの文は対象に範疇や属性を割り当てる機能を持つ。加えて、倒置同定文の場合は属性を与えることによって未同定の対象を同定するという機能を持つ。

(22)　措定文　[対象]-[範疇・属性]　対象に属性を与える
(23)　倒置同定文　[対象]-[範疇・属性]　対象に属性を与える ＋ 対象を同定する

同じように、倒置指定文も独自の機能論的特徴を持ち、その特徴は措定文や倒置同定文の場合とは大きく異なる。倒置指定文はある要素(内包的概念)に対して、別の要素(外延)を割り当てるという機能を持つ。

---

[8] ただし倒置同定文の述語名詞句には若干の制限があり、役割まで行かなくともある程度限定された範疇的概念が与えられる必要がある。「ラッセルはイギリス人だ(*イギリス人がラッセルだ)」のような倒置同定文は不可能だが、「ラッセルは戦後の反核運動に貢献した人だ(=戦後の反核運動に貢献したのがラッセルだ)」のような倒置同定文は可能である。
[9] 坂原(1990)は、この違いを属性付加と属性同定という言い方で区別している。

(24)　倒置指定文　[内包]-[外延]　内包的概念に外延を割り当てる

倒置指定文は指示や意味関係のレベルで他の類型と異なる特徴を有しているので、この類型を措定文や倒置指定文と区別するために機能論的な説明を持ち出す必要はない。しかし、指示や意味関係のレベルで倒置指定文とは異なる特徴を持った文が、倒置指定文と同じような機能論的特徴を帯びるということがあり得る。そのような例の一つは、西山(2000)が第二タイプの指定文と呼ぶもので、ある対象と同一であるものをいくつかの候補の中から選び出すというような種類の文である。

(25)　a. 山田太郎はどいつだ？
　　b. 彼は、左から3番目の男だ。(第二タイプの指定文)　西山(2000, p.38)

この文は、指示や意味関係のレベルでは倒置同一性文と類似している。二つの名詞句は個体を表し、二つの個体は同一物の関係にある。しかし機能論的には、この文はある要素に対して別の要素を選択指定的に割り当てるという機能を持ち、この機能は倒置指定文と共通のものである(この機能が具体的にどのようなものかは、第5節で詳しく分析する)。

3. 機能論的特徴の記述方法

文の機能論的特徴を記述するために、どのような方法を取ればいいだろうか。方法の一つは、主題構造とか情報構造などと呼ばれるような構造記述を用いるというものである。これらの構造は、文中のどの要素が主題であるかとか、情報焦点であるかといったことを記述したものである[10]。このような記述は、コピュラ文の諸類型の機能論的特徴を区別するためには、必ずしも十分なものではない。情報構造上は、措定文、倒置指定文、倒置同定文はいずれも述語名詞句が焦点であり、焦点位置の違いはない。

(26)　措定文　ラッセルはイギリス人である。　(後項焦点文)
(27)　倒置指定文　記述理論の発明者はラッセルである。　(後項焦点文)
(28)　倒置同定文　ラッセルは記述理論の発明者である[11]。　(後項焦点文)

焦点という概念を、より細かく下位分類するという方法もある。例えば、通常の焦点(ordinary focus)と限定的焦点(restrictive focus)といった概念(Jackendoff, 2002)を用いて措定文の焦点と倒置指定文の焦点を区別することができる。同じように、倒置同定文の焦点を区別するために別の種類の焦点を考えることもできる。しかしそのようなラベルを与

[10] 日本語コピュラ文の主題構造、情報構造に関する詳しい分析としては、天野(1998)、砂川(2005)などを参照されたい。
[11] この文は措定文とも倒置同定文とも読めるが、ここでは倒置同定文として用いられているものとする。

えるだけでは、これらの焦点の違いを説明したことにはならないだろう。それらの焦点がどのように違うかの説明を与える必要がある。

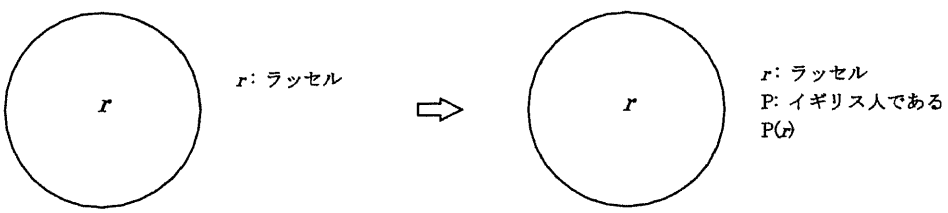
本稿では、「措定する」「指定する」「同定する」といった概念を、話し手が発話によって(聞き手の)心的状態に及ぼす操作として理解したいと思う[12]。「措定」とは、ある心的構成物に対して属性を付加することであり、「指定」とは、ある内包的な心的構成物に対して外延を割り当てる(何が外延であるか指定する)ことである。また、「同定」とはある心的構成物について、それがどのようなものか特定するということを意味する。従って、これらの文の機能を記述するために、これらの文が聞き手の心的状態をどのように変化させるかを記述する方法を開発する必要がある。心的状態を記述する方法としては、Fauconnier(1985)のメンタル・スペースを利用することができる。以下では、措定文、倒置指定文、倒置同定文がどのように聞き手の心的状態を変化させるかについて、具体的に検討していく[13]。

4. 措定

措定文は、対象に属性や性質を付加する。属性の付加には、対象の属する範疇を与える方法と、性質概念を直接与える方法とがある[14]。

(29)　ラッセルはイギリス人である。　(範疇による叙述)
(30)　ラッセルは温厚な性格である。　(性質による叙述)

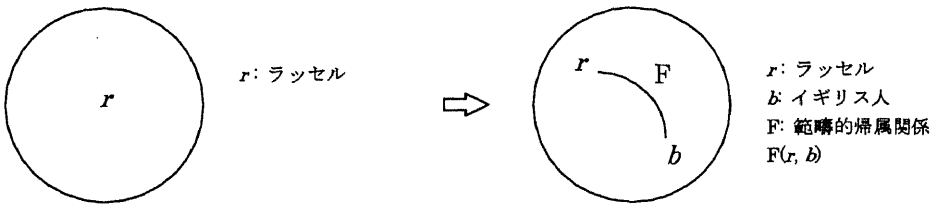
帰属する範疇についての情報はそれ自体が対象の有する属性の一部であるが、加えて、範疇の属性・性質は対象に継承される[15]。結果として、範疇による叙述は性質による叙述と同じように対象の有する属性・性質に関する情報を与えることになる。これらの文は、スペース中の要素に新たな属性を設定する。



【図1】「ラッセルはイギリス人である」

12 実際には、話し手が聞き手の心的状態を直接操作するということは不可能である。話し手は自分の心的状態を発話によって表示し、聞き手はその表示から話し手の心的状態を読み取って自分の心的状態をアップデートする。そのような伝達の詳細なメカニズムについては、ここでは踏み込まないこととする。
13 措定文、指定文、同定文等が心的状態に及ぼす変化をメンタル・スペース理論に似た枠組みによって詳細に分析した研究に東郷(2005)がある。東郷(2005)は、特に情報の帰属や共有知識の問題に関心を置く。
14 これらは高橋(1984)では種類づけと性質づけ、益岡(2008)ではカテゴリー属性と所有属性というような言い方で区別されている。
15 Jackendff(2002)は、叙述名詞句(predicate NP)は指標素性を持たず記述素性のみを持つものであり、記述素性が対象と結び付けられるのだという言い方をしている。

範疇が与えられる場合、単に対象に属性を付加するのではなく、ラッセルという個体とイギリス人という種の間に帰属関係を設定するという分析も考えられる。

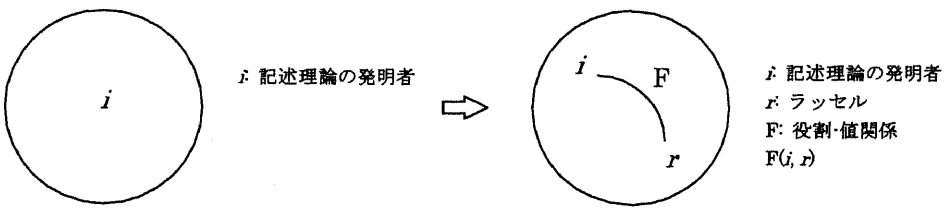


【図２】「ラッセルはイギリス人である」― 別の分析の可能性

このような分析は可能であるが、特に理由がない限り、わざわざイギリス人という新しい要素をスペースに導入する必要はないという仮説を取りたいと思う。スペースは我々が物事を整理したり推論したりするのに都合がいいように構築されるべきで、必要以上にワーキングメモリに負担がかかるような構成を仮定すべきではない。さしあたっては、対象がどのような範疇に属するかとか、どのような性質を有するかといった情報を、対象の属性として割り当てておくだけで十分である。

5. 指定

措定文が対象に属性を割り当てるのに対して、倒置指定文は役割のような内包的概念をその外延と結び付ける。すぐ後で修正することを前提として書くと、倒置指定文は心的状態に次のような変化を及ぼす。

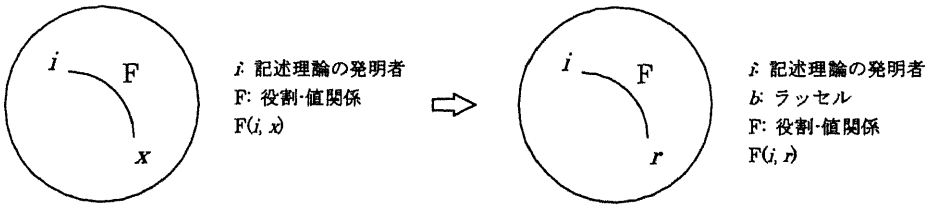


【図３】「記述理論の発明者はラッセルである」

倒置指定文が他のタイプのコピュラ文と非常に異なるところは、役割が値を持つということが前提とされるという点である。次の文は、ラッセル以外の誰かがフランス国王であるということを含意し、フランスが王制ではない(役割自体が存在しない)とか、王制であるが空位である(役割はあるが値がない)といった文脈では通常は用いられない。

(31)　フランス国王はラッセルではない。

西山(2003)の言い方を借りれば、「X がフランス国王である」ということを前提として、その X がラッセルであるということを述べているのである。従って、倒置指定文による心的状態の変化の記述は、次のように修正される。



【図４】「記述理論の発明者はラッセルである」(修正)

倒置指定文「記述理論の発明者はラッセルである」は、値 *x* をラッセルという個体 *r* で置き換える。個体 *r* は、既にスペースに導入されているかも知れないし、新たに導入されるかも知れない。既にスペースに導入されていた場合には、それまで別々の要素として登録されていた *x* と *r* が融合される。そうでない場合には、個体 *r* は知識ベース(長期記憶)の中から取り出され、*x* と置き換えられる。いずれにせよ、*x* を置き換えるべき値は適切な探索領域(例えば哲学者の集合)の中から選択され、該当する要素が複数ある場合には通常はそれらが全て(総記的に)列挙される。

役割 *r* が値 *x* を持つという部分が前提とされることによって、この文の情報伝達上の焦点は、*x* が誰であるかという選択、指定の面に集約されることになる。このような前提は、コピュラ文の他の類型には基本的に見られないものである。次の例は西山(2003)の言う措定文と倒置同一性文の例であるが、ラッセルがフランス以外のどこかの国王である(あるいは他の何らかの地位についている)とか、アインシュタイン以外の誰かと同一人物であるというような含意は持たない。

(32)　措定文　　ラッセルはフランス国王ではない。
(33)　倒置同一性文　ラッセルはアインシュタインではない。

役割に値を割り当てる文は、おそらく役割という概念自体の特性によって、標準的に値を持つという前提のもとで発話される。それ以外の文においては、文脈的な条件によって有標的(marked)に対応する要素の存在が前提とされる場合がある。例えば、あるパーティー会場に何人かの哲学者が招待され、その中にラッセルが含まれているということが分かっている場合に、次のような文でどの人物がラッセルかを述べることができる。

(34)　ラッセルは右から３番目の人です。

これは西山(2000)において、第二タイプの指定文と呼ばれた例である。この文は、指示や意味関係の観点からは倒置同一性文と区別できないが、文脈的条件によって倒置指定文と同じような要素を選択指定する文として用いられている。

6. 同定

措定文が既に同定されている対象に属性を付加するのに対して、倒置同定文は属性を与えることによって対象を同定する。倒置同定文は、名詞句の指示や意味関係のレベルでは措定文と区別できない[16]。倒置同定文とは、措定文が特に対象を同定するという機能を担ったものに相当する。また、そのような場合に限り、意味的、機能的に同等な同定文「～が～だ」が存在し得る。以下では、措定文と外見上の区別が難しい倒置同定文はひとまず措いて、倒置指定文と意味的、機能的に同等とされる同定文について主に論じる。

同定されているとか、同定するというのがどのような心的状態、心的操作であるのかを明らかにしなければならない。一つの考え方としては、ある事物が心の中で同定されているとは、その事物がどのようなものか知っているとか、他の事物とどのような関係にあるのか知っているということだと理解することができる。次の例では、名前しか分からない事物を、素材や製造工程を明らかにすることによって、その事物を百科事典的な知識の中に位置付けている。

(35) 次に卓上に現われたのが、献立表に単に「熊肉」と書いてある料理だ。これについても、張伊三が解説を加えるのである。これは、羆の腿の肉であった。まず、肉を高熱で充分煮込み、さらに五香の粉と酒に漬け込んで一昼夜を経、それを本胡麻の油でいためて、塩と醤油で味をつけ、野菜を添えて供したのが、これであります、と言うのだ。 佐藤垢石「香熊」

しかし同定文は、名前しか分からないような事物に対して定義的属性を割り当てるためだけに用いられるわけではない。同定文は、日常的な意味では十分理解されているものに学術的な定義を与えたり、あるいは解釈を与えるために用いられる。

(36) ニュートンは物体から微粒子が飛んで来るのが光だと考えたが、ハイゲンスが出て来て波動説を称(とな)えこれが承認されるに幾多の年月がかかった。
寺田寅彦「研究的態度の養成」

(37) かういふ彫刻の神秘的な動きがもう少し能動的に動いてくるのが能の動作であるやうな気がする。 高村光太郎「能の彫刻美」

[16] 全ての倒置同定文が措定文と同じ意味関係を有するわけではない。後で述べるように、対象の同定は、対象に属性を割り当てる以外に、対象となる概念の事例を例示することによって行われる場合がある。

同定文はまた、事物を個人史や民間伝承、ある特定の分野の歴史の中に位置付け、個人的ないし文化的な価値や存在意義を与えるためにも用いられる。

(38) 然るに島崎藤村さんが信州の小諸から、これを是非讀んで見ろと、わざわざ小包で送つてくれたのが、この「ボルクマン」である。 蒲原有明「劇壇の新機運」

(39) 昔の弘法大師さえも、千足の草鞋(わらじ)を用意なすって、それを穿(は)ききってもまだ登れなかったのが、あの山だそうでございます

中里介山「大菩薩峠 鈴慕の巻」

(40) 勝負の鬼と云われた木村前名人でも、実際はまだ将棋であって、勝負じゃない。そして、はじめて本当の勝負というものをやりだしたのが升田八段と私は思う。

坂口安吾「坂口流の将棋観」

同定文はまた、対象が有する本質的属性の一つを例示するというだけの場合にも用いられる。

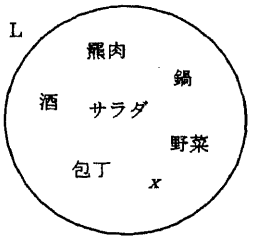
(41) 家鴨も雄の味が上等としてある。四月は鴨の季節であるから、雌雄二羽が店頭にあったら雄を求めるのが食通といえる。 佐藤垢石「季節の味」

(42) 水を使えるだけ使う、いいかえれば、水を活かせるだけ活かすというのが禅門の心づかいである。 種田山頭火「水〔扉の言葉〕」

これらの事例は、同定とは必ずしも一般的な知識としてその対象を知っているかどうかということではないということを示している。対象を(何らかの意味で)同定できるということは、ある局所的な知識フレーム(物理学とか個人的経験・価値観とか)の中でその対象がどのような定義や意義を持つものであるかを知っているということだと理解することができる。同定文は、「光」が物理学というフレームの中でどのような現象であるのかとか、「能の動作」が彫刻という分野との関係においてどのような意味を持つのかとか、イプセンの戯曲「ボルクマン」が話者の経験や価値観の中でどのような存在意義を持つのかとか、「食通」が家鴨の選び方というフレームにおいてどのような行動を取るものであるのかといったことを述べるために用いられる。

同定文が心的状態に及ぼす変化をどのように記述するかについて考えることにしよう。ここでは、スペースと要素によって、フレームとその部分を表現する方法を試みたいと思う。対象が結び付けられる局所的知識を一つのスペースLとして表現する。スペースLは料理とか物理学とか個人的経験・知識というような意味論的フレームによって構造が与えられている。同定文の主語は、スペースLに役割や種のような内包的概念を設定する。この内包的概念は、スペースLを構成する他の要素との関係によって内包的に定義される概

念であり、スペースＬに構造を与えているフレームの一部を構成する。

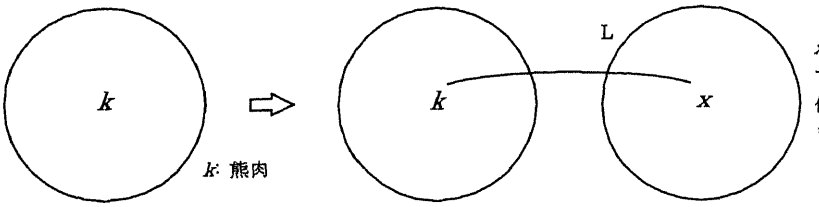


料理のフレーム
調理者：主婦，料理人，etc.
道具　：包丁，まな板，鍋，コンロ，etc.
材料　：羆肉，酒，五香の粉，胡麻油，塩，醤油，野菜，魚，卵，砂糖，etc.
調理法：煮込む，漬け込む，炒める，味付け，添える，和える，etc.
完成品：目玉焼き，ムニエル，サラダ，…，x

x: 羆肉を煮込んで…野菜を添えたもの(内包的概念として)

【図５】料理のフレーム

同定文は対象と内包的概念 x を結び付ける。x はフレームの中のある特定の部分を示すようなものであり、この要素と結び付けられることによって、対象がそのフレームにおいてどのような位置を占めるかが定まる。



x: 羆の腿肉を煮込んで漬け込んで炒めて味付けして野菜を添えたもの

【図６】「羆の腿肉を煮込んで…野菜を添えたのが「熊肉」である」

措定文は対象に属性を与え、(倒置)指定文は内包的概念に外延を与えた。同定文は措定文と同じように対象に属性を与えるが、属性はフレームの中で特定の位置を占めるようなものであり、結果として対象は何らかのフレームと関係付けられる。対象は様々な種類のフレームの中で同定することができる。例えば「熊肉」という料理について言えば、料理のフレームの中でどのようなものか同定される他にも、個人的経験とか、食事とか、文化的価値といった様々なフレームの中で同定され得る。

(43)　東京に出てきて最初に食べたのが「熊肉」だった。　(個人的経験)
(44)　いちばん高価なコースの最後に出てくるのが「熊肉」だ。　(食事)
(45)　一流の文化人がこぞって求めたのが「熊肉」である。　(文化的価値)

最後に、少し変わった種類の同定文について言及しておきたいと思う。ここまで、同定は対象に属性が与えられることによって行われるものであると見なしてきたが、必ずしもそうではない。特に範疇とか抽象的概念といったものについては、しばしば属性よりも具体的な事例を例示することによって特徴付けられる。次の例では、「花」とか「春」という

事物がどのようなものであるかが、具体的な事例を例示することによって特徴付けられている。

(46)　坊やの鹿からはなしをきくと、お父さん鹿とお母さん鹿は口をそろえて、「ぼオんという音はお寺のかねだよ。」「おまえの角についているのが花だよ。」「その花がいっぱいさいていて、きもちのよいにおいのしていたところが、春だったのさ。」とおしえてやりました。　新美南吉「里の春、山の春」

従って、本稿では(倒置)同定文は対象を同定する機能を持つという点のみが独特であって、それ以外は措定文と同じものだという言い方をしてきたが、訂正しなくてはならない。同定と言う機能は、[対象]-[属性]という意味関係を持った文に限らず、[概念]-[事例]というような意味関係を持った文によっても実現される場合がある。このような例示による同定をどのように記述するかについても考えなくてはならないが、今後の課題としたい。

7. まとめ

本稿は措定、指定、同定といった日本語名詞述語文の記述的分類について、特に機能論的観点に注目して再分析を行った。これらの分類については西山(2003)などによる名詞句の指示性の観点からの分析があるが、指示という概念を理論的基盤から整理して考えていくと、西山(2003)の説明しようとしていることは指示の理論だけでは納まり切らないように見える。本稿は名詞述語文の意味的、機能的特徴を十分に記述するためには、少なくとも名詞句の指示性、指示対象間の意味論的関係、文の機能論的特性(文の使用によって心的状態がどのように変化するか)の三点を区別する必要があることを主張した。特に、措定文と倒置同一性文を区別したり、倒置指定文と第二タイプの指定文との類似性を捉えようとしたりするためには、名詞句の指示性や要素間の意味論的関係よりも、どのようなプロセスを経て要素と要素がどのように結び付けられるのかという機能論的観点からの分析が重要である。残された課題としては、本稿は紙幅の都合から、それほど多くの事例について詳細な分析を提示することができなかった。例示による同定とか、ウナギ文の扱いなどについては、他稿に譲るものとしたい。また、倒置指定文と指定文、倒置同定文と同定文など、「～は～だ」構文と「～が～だ」構文の関係についてもあまり詳しく論じることができなかった。これらの構文が本当に意味的、機能的に同等なのかといった問題についても、詳しく分析する必要がある。

【参考文献】

天野みどり (1998). 「「前提・焦点」構造からみた「は」と「が」の機能」. 『日本語科学』, 3, 67-85.

今田水穂 (2006). 「日本語同定文の主語名詞句の意味論上の取り扱いについて」. 『筑波応用

言語学研究』, 13.

井元秀剛 (1995). 「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」. 『言語文化研究』, 21, 97-116.

金水敏 (1990). 「「役割」についての覚書」. 筧壽雄教授還暦記念論集編集委員会(編), 『ことばの饗宴: 筧壽雄教授還暦記念論集』くろしお出版, 351-361.

熊本千明 (1995). 「同定文の諸特徴」. 『佐賀大学教養部研究紀要』, 27, 147-164.

砂川有里子 (2005). 『文法と談話の接点: 日本語の談話における主題展開機能の研究』. くろしお出版.

田窪行則・金水敏 (1996). 「複数の心的領域による談話管理」. 『認知科学』, 3 (3), 59-74.

東郷雄二 (2005). 「名詞句の指示とコピュラ文の意味機能」. 『指示と照応に関する語用論的研究』, 1-59. 科学研究費補助金研究成果報告書.

西山佑司 (2000). 「二つのタイプの指定文」. 山田進・菊地康人・籾山洋介(編), 『日本語 意味と文法の風景: 国広哲弥教授古稀記念論文集』, 31-46. ひつじ書房.

西山佑司 (2003). 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』. ひつじ書房.

Carlson, G. N. (1977). A unified analysis of the English bare plural. *Linguistics and Philosophy*, 1 (3), 413–457.

Donnellan, K. (1966). Reference and Definite Descriptions. *Philosophical Review*, 75, 281–304.

Fauconnier, G. (1985). *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. MIT Press. 坂原茂, 水光雅則, 田窪行則, 三藤博(訳) (1987) 『メンタル・スペース: 自然言語理解の認知インターフェイス』白水社.

Fauconnier, G. (1991). Roles and values: the case of French copula constructions. In Georgopoulos, C. & Ishihara, R. (Eds.), *Interdisciplinary Approaches to Language: Essays in honor of S. -Y. Kuroda*, pp. 181–206. Kluwer Academic Publisher, Dordrecht.

Jackendoff, R. (2002). *Foundations of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution*. Oxford University Press, USA. 郡司隆男(訳) (2006) 『言語の基盤: 脳・意味・文法・進化』岩波書店.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.

池上嘉彦，河上誓作(他訳) (1993)『認知意味論: 言語から見た人間の心』紀伊国屋書店.

Lambrecht, K. (1988). Presentational cleft constructions in spoken French. In Haiman, J. & Thompson, S. A. (Eds.), *Clause Combining in Grammar and Discourse*, 135–179. John Benjamins Publishing Company.